

# 滇金絲猴を求めて

雲南の旅

枋尾武

## 一、雲南の旅

滇とは雲南の古称である。この度、一年の研修の機会を与えられて、『山海経』の動物の調査のために雲南に出かけることにした。物事に強い関心を示す妻との二人旅である。三〇〇ミリの望遠レンズとやや旧式のビデオカメラと補助用のカメラ持参である。

ここで雲南についての歴史を略述しておく。青銅器の遺物もあるが、この地は現代中国において少数民族と呼ばれ非漢族の地である。前漢の武帝(BC一四〇〜八七年)の頃以来雲南を滇と称した。この地の金絲猴を滇金絲猴と称するのはこの為である。三国時代の蜀(AD二二一〜二六三年)の地で

ある。諸葛孔明が二二五年西南夷を討つたのもこの地である。漢代以後越嶲とも称したが、唐以後領土を失うこともあり、元を経て明代に至り漢民族の本格的な移入が始まる。

一九九五年の雲南の総人口三九八九・六三万人中一三五五万人、三四・一%を占める。少数民族は一人子政策をとらぬので調査より多くの人口を持つと考えられる。民族は彝族の四一六万人、以下白族一三九万人、金絲猴の居る薩瑪閣等の僱僕族は五七・八万人、その他計二十五族と極少数民族も八二・九八万人である。行く先少数民族に会い、段々島の美しさ、紺碧の長江の上流等真にシャングリラである。次に旅のあらましを記そう。

二〇〇三年二月十五日(土) 后前十時成田空港を予定通り出発、広州空港を経て十九時雲南の省都昆明着、海逸大酒店

というホテルに泊る。ガイドは劉洪昆氏、自然に大変興味を持つ好人物。翌日は昆明を朝八時航空機にて出発、五十分に中甸空港着。当地ガイドのチベット族の青年文建祿氏の出迎えを受ける。中甸は地元では「香格里拉」シヤングリラ「桃源境」と呼称している。桃源境の本家だと自慢で自認する。空港の標高三四〇〇メートル、やや動悸を覚えた。

中甸ではラマ教寺院松贊林寺帰化寺を見学する。ラサのポタラ宮を小さくしたような寺院で莊嚴であり多くのラマ僧が修行している。雪が氷り寒さが厳しく寺には別に暖房装置もなく体の芯まで冷える。弥勒菩薩や高僧の像が安置されているが、文化革命の時相当破壊されたという。外壁にもチベット語の経文が刻されているが、これも例外ではない。

中甸から薩瑪閣までは良く舗装された山道であるが、断崖を開削した道で時に大きな落石があつたりしてヒヤリとする。そこから見る高い山には雪があり、眼下には納帕海という湖が横たわり時間の経過を忘れる。大自然の搖籃に心の安らぎを覚える。途中食事を摂るが地元で採れるドクダミを炒めたものや長江の支流である金沙江の小魚のスープ等素朴ではあるがよく口になじむ。どこか日本の料理に通うものがある。車窓から見る藏族や僱族の女性の服装が美しい。北方の

北京や西安の人達に比してなじみややすい。金沙江に沿った断崖の段々畠の緑も暖か味を覚える。

薩瑪閣に着後、午后宿舎の「腊普吉祥酒樓」にて地元料理を食す。寒冷な地であるが野菜も豊富で豚肉の炒め物や麵類も懐しさを覚える。宿で造った酒・梅酒も口に馴染みややすい。日本人は初めてということで大歓迎を受ける。ただ年配の人達の間では支那事変の事等気にしている様子である。ただし伝聞である。

夜、納西族の夫婦がかつて歌垣で結婚した時の様子を再現してくれた。愛の言葉の掛け合いが面白かった。踊りのうまい人達でそれぞれの民族には歌垣の様式があるという。ステップは絶妙で、家族を中心ににぎやかで時を忘れる程であつた。こちらも例外なくカラオケを使つていたのでおかしい。宿舎は招待所である。全国にあるが、今では外国の観光客はあまり泊らぬが、当地ではこれしか無い。風呂は温水器の湯を用いるが温度が低く、魔法瓶の熱湯を用いて体を拭く。あまり汗もかかぬので不自由は無い。トイレは一応水洗式であるが紙は流せない。

村には百年以上のクルミの原木が多くある。また、こちらは寒冷の地であるがソラマメが満開で、野菜も青々としてい

る。高山が寒風を防いでくれる盆地であるからだろう。また薄緑色の粘板岩が山の崖に露出しており、村にも置かれていて硯に造つてみようと思ふ。その後未だ試みてはいない。

二月十七日(月) 朝宿舎を出発、薩瑪閣自然保護区に向う。東京では久しく見たことのない碧天。この保護区は雲岭山脈の麓にあり約千頭の滇金絲猴が栖息するという。道中道が細くなり、ポニーのような小形の馬で雪と氷の山道を進む。馬は時々休憩しながら歩く、地元の人材粗末な運動靴である。道中にはシャクナゲがあり、咲けば美しいだろう。雲杉(雲南杉)の太木がそこに見られる。クチナシも所々に見える。金絲猴の好物であるサルオガセも目立つ。保護区の監視小屋で休み再び雪の中を進み待機していると葉が所々揺れ、金絲猴の群を見る。特徴ある上を向いた鼻孔と赤い唇の金絲猴に直面感激、デジタルビデオと三〇〇ミリレンズの一眼レフを構え夢中で撮影。動きが速いのでガイドの劉さんにも時にシャッターを押してもらう。何とか写すことが出来たが、必ずしも満足とは言えないが、感激しきりである。今夏には再び四川省から雲南に縦断して完璧な撮影と考えたが、サーズの流行で中止、後日を期することになる。この山行で維西僳僳族自治県塔城鎮人民政府鎮長の余小新氏が同行して下さ

り世話を受け感謝している。日本人最初の訪問として帰国したら紹介するように依頼されながら、六月五日の研修報告と七月五日に国文学会の講演の時にビデオ紹介するに止つている。この金絲猴については次章で詳しく紹介したい。この夜は盛大なリス族群舞を見せてもらう。私や家内も衣裳をつけてもらう。

二月十八日(火) 晴

宿舎を朝九時過に出発、中甸に向う。途中下車して写真を撮影、再び納帕海を眼下に見る。広大な湿地帯であり、放牧もされるらしい。

中甸では中心鎮公堂や大亀山公園を見学、途中、古いチベット風の屋並を見る。新華書店にて『国宝滇金絲猴』(雲南科技出版社)なる写真集を購入。多彩ではあるが、あまり映像の出来が良くない。その他二三の資料を入手。ホテルは中甸環太酒店。

二月十九日(水) 晴

朝九時半中甸飛行場を出発、昆明着。西山龍門に向う。車を降りて三清閣まで歩く。清の乾隆年間に彫られた道教石窟は極めて精緻、吳清来という道士が十四年を要して掘つたという。慈雲河へ至る道は絶壁にあり、滇池を眼下に見る。帰

りの道を散策、日本のそれよりやや色が淡い花蘇芳・山吹・桜の類が咲いていて心がなごむ。この後、華亭寺に寄る。大雄宝殿の三尊金身仏像、五百羅漢像、天王殿の四大天王像、金身弥勒菩薩像等を見るが、羅漢像が古色あつて良い。昨年大火があつたという。庭の枝垂海棠、梅の古木、椿がすばらしい。寺の画廊にて京劇俳優の梅蘭芳の「丹柿双猴図」を購入。雲南椿は山茶花系で八重が多い。日本で見える數椿は日本在来種と言われ、四川省等で見られるものは日本から輸入されたという説がある。

昼食後、中国科学院昆明動物研究所を訪う。研究院の鄒(鄒)如金研究員に案内してもらい山上の滇金絲猴の飼育所を見学。孫悟空と愛称される六十五歳?のボスや生後八日の子を抱く母猴等眼前に迫る姿に感嘆。一眼レフとビデオカメラで撮影。再び科学院に案内され、哺乳動物の權威、王应(王)祥教授に長臂猿(手長猿)や金絲猴について質問。教授監修の長臂猿の絵葉書をもらう。また、教授に研究所の貴重な動物の全身の毛皮の標本を見せてもらう。金絲猴・パンダ・ベンガル虎・長臂猿・野牛等多彩である。これ等の手当てを毎日されるそうで大変な苦勞の様である。

三峡の猿についても質問を試みたが、今は長臂猿は居な

いとのこと。宋の牧谿の猿図のモデルは長臂猿であるが、かつては多く居たらしいことが、李白の「早發白帝城」に「兩岸猿声啼不住 輕舟已過萬重山」の句に見えるように多くの詩人が作品を作っている。四川省には長臂猿やパンダあるいは金絲猴が共に住んでいたと考えられる。<sup>3)</sup>

研究所の滇金絲猴のボスの孫悟空という愛称は中国人の一つの夢と願望であろう。木の上での生活を中心にした金絲猴は地上生活をしないわけではないが、長時間の歩行には適しておらず、『西遊記』の挿絵<sup>4)</sup>を見ても日本猿と同系のマカク属の獼猴であることはすでに知られている。<sup>5)</sup>もし、金絲猴に孫悟空の影を見るならば空中を自由に飛ぶ悟空と木から木へ自在に跳び移る金絲猴の姿が重なるのであろう。金絲猴は長い尾を特徴とするが、絵に見る悟空は獼猴のように短尾であり立ち歩きも得意である。金絲猴に悟空を見るのはロマンである。

滇金絲猴を見る旅はこれで終るのであるが、雲南の旅をしばらく続けたい。

二月二十日(木) 晴

昆明を朝の七時四十五分に飛行機にて麗江に向う。雲南省の都昆明は常春の地であるが、この地も良い氣候の所である。

世界遺産の当地は清潔な風を保つ。昼食後故城（古い町）を散策。長江の底から取ったという縞模様石畳が心安らぐ。町からは玉龍雪山（五五九六メートル）の雪と紺碧の空の対称がすいこまれるように美しい。この町は納西族を中心に漢族・白族・彝族・僳族が混在する。

故城には納西族の店が軒を連ねている。刺繍した衣服や小物、銀・真鍮の茶器や水指等売っており、真鍮の水指を購入入。

昼食後、玉峰寺を訪う。明の成化年間（一四六五—一四八七年）に植えられ赤く八重の椿の巨木がうねうねとわだかまる。二本がからまり合い一本になったもので、夫婦和合に良いという。「山茶之王」と称えられている。二万輪も咲くというので「万朶椿」とも称す。また雲南桜、十里香（オガタマ）・山玉蘭（コブシカ）・海棠の巨木を見る。

山を下って黒龍潭を散策。水はあくまで澄みきっている。水に浮ぶ海棠花（トチカガミ科ミズオオバコ属）が白い花を綿を散り蒔いたように咲いている。潭は玉龍雪山の水を受けて麗江の源流となる。潭の回りには柳の巨木や山玉蘭の大木が見える。この地には東巴文化の研究所や博物館がある。東巴文字は一種の絵文字であり、故城の壁にタイルの文様とし

て使われたり、東巴文字の書家も活躍している生きた文字である。この文字は古代文字として納西族が伝えるものである。東巴文字の古文書類も多く伝えられている。戈阿干著『東巴文化真籍』（雲南美術出版社）等の資料を購入。DVDの「雲南風光」も買ってみる。夕食は故城のレストランで当地風のシャブシャブを食す。シイタケ・豚肉・野菜等が主材料。ちなみに麗江のガイドはナシ族の母と漢族の間に生れた李鳳雲女史。

二月二十一日（金）晴一時雨

この期の雨は珍らしい。雨期は六月頃から十月頃までらしい。麗江を八時三十分に出発、車で大理に向う。昆明の標高は約千八百メートル、麗江は二千四百メートル、大理は二千メートル。高原の高速道路の左右に平行あるいは眼下に農村の段々畝や丸く盛り上った堆肥の山を見ながら進む。

途中白族の新華村に寄る。ここで現地ガイド孫微嬢と合流。白族の町は白壁の家が目立つ。漆喰の建造物を眺めながらふと姫路の白鷺城を思い出した。この村が日本の白壁のルーツかと懐かしく感じた。当地は藍染の発祥地として知られる。ロウケチ染の現場を見学。今はそれ程手のこんだ作品は少ないが、雲南省博物館に展示している物は実に精緻な作であ

る。奈良時代にどのような経路で伝えられたのかと遠い昔に思いを馳せる。

昼食はチーズを湯葉風にした物が珍しい。大理故城は麗江の故城より大きいのが、やや生活感が稀薄。この後、崇聖寺三塔を見る。南詔国（唐の開成元年＝八三六頃）が建立。塔の前方には洱海（エルハイ）という湖が広がり、一面菜の花の黄が湖面と美しい対称を見せる。大理博物館は二階建の瀟洒なもの。当地で出土した武器や埴や陶器類が展示してある。今夜の宿舎は台湾系の亜星大飯店、珍しく水回りが良い。

この地で忘れてはならないのが地名ともなった大理石の産地である。山からは今も石が掘り出され、石像や建築材が造られている。山は石灰岩や大理石で出来ているので木が少い。

二月二十二日（土）晴

朝六時に食事、九時十分大理発飛行機にて昆明十九時四十五分着、運転手の劉さんに迎えられ石林へ向う。この名勝の地は昆明の東南一〇〇キロメートル、彝族自治区にある。大小の石が林立するカルスト地形は日本では見られぬ偉観。八千万年前に形成された石灰岩より成る。観光は別の機会に譲り、遠望するのみ、記念に写真に収める。

昼食後、旅の目的である「爨龍顔碑」に向う。碑の主の

爨氏は戦国時から勢を振った西南夷の豪族で、爨龍顔、字は仕徳は劉宋の寧州刺史となり元嘉二三年（四四六）没。この墓碑は大明二年（四五八）に建立された。碑高四・二メートル、上端の幅一・三五メートル、下端の幅一・四六メートル、厚さ二五センチメートル、碑額は半円形で、上部に青龍・白虎・朱雀が浮彫され、横長方形の碑額を挟んで下部の中の穴と左右に平行に日月を配す。日の中には三足の鳥、月の中に蟾蜍（ひきがえる）を配す。碑額には「宋故龍驤將軍護鎮蛮校尉寧州刺史邛都県侯爨使君之碑」と隸書に近い楷書で刻されており痛んでいる。碑文は同字体で二十四行、行四十五字。碑面はか

この碑は陸良県城の南十四キロメートルの貞元堡にある元斗閣寺の碑亭にあつたものを中学校の敷地に移している。当日、緑日の最中で、バザールには肉・野菜・日用品・靴の修理等ありとあらゆる生活用品が見られた。碑の管理人を探してもらいやつと見ることが出来た。野趣に富んだ雄渾な字体に俗字・異体字が多い。幸い、拓本・法帖あるいはその影印本が容易に見られる。

この後、曲靖県（昆明より一八〇キロメートルにある「爨宝子碑」）に向う。県城内の第一中学の庭園の碑亭に安置され

ている。保存状態は「爨龍顔碑」より良い。中学の先生の説明を受ける。字体は前者より更に更に隸書に近い楷書体。前者を大爨に対して小爨と称される。東晋の義熙元年(四〇五)建立。碑額は半円形で、中に横長方形に五行、行三字で「晋故振威將軍建寧太守爨府君之墓」と書かれている。碑高一九〇センチメートル、幅七十一センチメートル。碑文は十二行、行三十字。これに紀年「大亨四年歲在乙巳四月上旬立」と記し、本文下一格をあげて行四字、十三行で「主簿揚馨。録事孟慎。：威儀王玉」と記す。なお大亨は元年で終っているが僻遠な地で、年号がかわつたのを知らず使つたものとされる。この碑帖も今では拓本や影印本が容易に入手出来る。参考までに両碑の入場料は一人三十元、昆明からの車代千二百元であった。

二月二十三日(日)晴

昆明の雲南省博物館を見る。図録も既に出ているので予備知識もあるが、規模は小さいが、恐龍の骨格、新しい出土品、陶磁器も数少いが良質のものもある。また当地第一の名利円通寺も見る。十四時十五分昆明発成田二十時着。短期間の旅であつたが充実したものであつた。

## 二、滇金絲猴について

中国に現存する猿の全体像については別稿に譲るとして、金絲猴と称する霊長目(Primates)、猴科(Cercopithecidae)、仰鼻猴属(Rhinopithecus Milne-Edwards)の猿猴である。金絲猴は「金絲仰鼻猴」(Rhinopithecus roxellanus)、別名川金絲猴、金絲猴とその亜種である「黒仰鼻猴」(Pygathrix bieti)、別名滇金絲猴。「灰仰鼻猴」(Pygathrix brelichi)、別名黔金絲猴、白肩仰鼻猴の三種が中国に生存し、ベトナムには極少数ではあるが「越南仰鼻猴」(Rhinopithecus bieti)、別名東京仰鼻猴が居る。いずれも絶滅危惧種であり、中国ではパンダと共に国宝として大切に保護されている。この金絲猴はゴールドモンキー、チベットコバナザル、イボハナザル、コバナテングザル、チュウゴクシシバナザル、キンモウザル等の多彩な呼称を有する。

第一の金絲仰鼻猴は日本でも横浜市のズーラシア等で親しまれていて現地でも二万頭ぐらい存し、四川、甘肅、陝西、湖北各省に分布する。四川省に最も多く、川金絲猴と呼称される由縁である。金絲猴四種に共通している特徴は鼻の穴が

上を向いている(仰鼻)こと、尾長が体長より長く、毛が柔かく長く、毛皮が敷物にされたことである。今泉忠明氏の言の如く(Roxellanae)、トルコの皇帝の宮廷にいたロシア人の婦人の顔を思い出しての命名という。青いアイシヤドウト棕紅色(シユロイロ)あるいは黄金色の長毛は美しい。英名(Chinese snub-nosed monkey)は鼻が短くあぐらをかいた(仰鼻)の特徴を表わす。その栖息海拔は千五百〜三千五百メートルである。その詳細は別稿に譲る。

次に黔金絲猴は灰色を基調にするが、顔面のアイシヤドールや尾等の特徴は金絲猴に似ている。現在貴州省東北の梵淨山という限られた地に九百〜千頭住んでいる。海拔五百から二千メートルの地である。英名は(Grey Snub-nosed monkey)はその特徴の一端を示す。

滇金絲猴を見ることは雲南旅行の最大の目的であったが、満足とは言えぬとして日本人最初(当地の人の言)に栖息地で見聞し、ビデオカメラや一眼レフで撮影出来たことは喜んで良いと思う。「山海経」中山経に見える雉は兩山リウサンに居るのであるが、この山は四川省の万県の東北に位置する開県の北、觀面山クワンメンだとされるので仰鼻金絲猴である。

ここで滇金絲猴の特徴を記そう。英名(Black Snub-

nosed monkey)と呼称されるように黒色を基調にしている。川金絲猴に似ているが、体色を異にする。諸文献の特徴を整理すると、

(A) 体形特徴 四肢粗壮、前肢は後肢より短い。

○ 体長 七十四〜八十三センチメートル。

○ 尾長 五十一〜七十二センチメートル。尾毛が蓬トモの毛のように長い。

○ 体重 成年雄三十〜四十キログラム、雌十五キログラム前後。

○ 頭円、頭頂に黒色冠毛あり。耳、短し。頬囊無し。唇、

肥厚・突出。鼻孔、上仰。毛長、背・肩部長毛三十センチメートル。雄、肩部、深灰黒色長毛、蓑衣ミのように下

衰。臀部、白色長毛。雌は毛やや短い。

○ 体色 雌雄毛色類似。顔面、青灰色、わずかに紫色の斑

点あり。臉部、藍色。眼の周り白色。唇、赤色。休背・

体側・四肢の外側・手・足・尾、灰黒色。喉・頸下・頸

側・前肩・胸腹・四肢内側共に灰白色。臀部、白色。

(B) 食性 主食は冷杉(モミ属)・雲杉(トウヒ属、エゾマツ

の類)等の針葉樹の若芽・花・松実・苔蘚・地衣類の一種サルオガセ等を食す。夏期には昆虫・竹の子・若竹葉・小



動物を食す。

(C)繁殖 発情、六〜十二月、出産期一〜六月、妊娠期間一八  
九〜一九八日、每胎一子。

(D)栖息海拔 三千〜四千メートル(中国霊長類中最高地帯)

(E)栖息場所 陰暗針闊混交林帯、樹上生活、時に地上生活。

(F)活動時間帯 日中。

(G)群 千〜千五百頭。

(H)分布 雲南西北部(徳欽、維西、麗江、劍川、蘭坪、雲

竜)。西藏(芒康)。

滇金絲猴の特徴は以上のようなのであるが、「百聞は一見に如  
かず」の譬えのように、「百言も一見には及ばない。薩瑪閣の  
野生を見、雲南動物研究所の數頭を實見して、文献上の説明  
を納得することが出来た。

### 三 古典世界における金絲猴

#### イ「本草綱目」における金絲猴

『本草綱目』は古典的博物学の集大成であると共に近代的博  
物学の萌芽を示す記念すべき大著である。著者である明末の  
李時珍(生没年未詳)は、三十年の歳月をかけて万歴十八年

(一五九〇)に成書、万歴二十四年、遺子李建元が朝に奉り、  
万歴三十一年(一六〇三)刊。日本では慶長十二年(一六〇  
七)には林羅山が長崎にて入手、徳川家康に献上。寛文十二  
年(一六七二)に刊行されている。この書の卷五十一、獸二、  
狸、風狸。獸四常備怪類共八種に彌猴、狨、果然、猩猩、狒狒の  
猿猴類とその一種と思われる怪類の罔両、彭侯、封が収めら  
れている。

風狸(狸)は綱目の「釈名」に風母・風生獸・平猴・  
狨まごと別名を有し、野生の猫の一種と考えられていた。しか  
し、靈長目、懶猴科(Lorisidae)蜂猴属(Nycticebus  
Pygmaeus)の原猿類である。蜂猴(Nycticebus coucang =  
ナマケザル)、間蜂猴(Nycticebus intermedius = ナカナマ  
ケザル)、矮蜂猴(Nycticebus Pygmaeus = コビトナマケザ  
ル)と考定できる。一般にはそれぞれ、英名によりスローロ  
リス、インターメジイトスローリス、レッサースローロ  
リスと呼称されて親しまれている。詳細は別稿に譲りたい。

彌猴は猴科(Cercopithecidae)の彌猴属(Macaca Laped)  
の彌猴や短尾猴等六種でマカク属と総称され、日本猿もその  
一種であり、孫悟空のモデルとされる。沐猴・為猴・胡  
孫・王孫・馬留と別称される。『本草綱目』においては猴科

に金絲猴の仰鼻猴屬 (Rhinopithecus Milne-Edward) の四種と葉猴屬 (Semnopithecus = コノハザル) の黒葉猴、長尾葉猴等五種及び長臂猿科 (Hylobatidae = テナガザル) まで含んでいる。牧溪のモデルにした猿はこのテナガザルである。<sup>(1)</sup> 猩猩や狒狒は今の中国には生存しない。

綱目に説かれる金絲猴と考えられるものは猿(猿)と果然(禺・狄・雌)と蒙頌と獬獬である。

(I) 猿

(a) 似テ猿ニ而金尾ノ者ハ猿也。

(b) 時珍曰ク、猿ノ毛ハ柔ク長ク如シ絨ノ。可ニ以テ藉ク、

可ニ以テ緝ム。故ニ謂フ之ヲ猿。而猿字亦從レフ柔ニ也。

或云フ、生ニ于西戎ニ、故ニ從レフ戎ニ也。猿古文字作

猿ニ。象形ナリ。今呼ニテ長毛ノ狗ヲ為スハ猿、取ニ此ノ象ニ。

(c) (唐・陳) 藏器曰ク、猿生ニ山南ノ山谷ノ中ニ。似猿

而大ナリ。毛長ク黃赤色。人將ニ其ノ皮ヲ作ニ鞍褥ト。

(d) 時珍曰ク、(宋)・楊億ノ談苑ニ(今本不見)云ク、猿ハ

出ツ川峽ノ深山ノ中ニ。其ノ状大小ノ類シテ猿ニ長尾

作ス。金色。俗ニ名ニ金線猿ト。輕捷ニシテ縁ノ木ニ。

宋・時文武三品以上ニ許用ニ。猿座ト。以ニ其ノ皮

為レ褥ト也。

(a) (d)の文において、その特徴を要約すると、

○柔かく長毛で絨(よく練った糸)のようである(b)。毛長

く黄赤色(c)。

○長尾で金色(a・d)。

○猿に似て長尾(a・d)。

○動きが軽捷で木上生活をする(d)。

○皮を鞍や褥にする(c・d)。

○川峽に産出する(d)。

となる。川峽とは四川省の三峡を指す。猿に似るが長尾とは、猿は長臂猿(テナガザル)であるが、尾はほとんど無いところ種を異にする。木上生活をし、軽捷な動きをする点は共通である。金色で長毛の如き身体の特徴と四川省に住むという条件は今も四川、甘肅、陝西、湖北に分布する金絲猿(川金絲猿)とするのが妥当である。ただ果然類と別項にしていること、仰鼻を言わないところに疑いを存す。或は葉猴か。<sup>(2)</sup>

(II) 果然

果然は金絲猿の一種。綱目の「釈名」に別名として「禺音禺。狄音又。或作狄。雌音。或作レ獨。仙猿」と記す。

果然は猥然とも書く。綱目を次に引く。

(a) 大ニキクシテ而尾長ク赤目ナル者ハ禺也。

(b) 小サクシテ而尾長ク仰鼻者狢也。

(c) 似テ狢ニ而大ナル者ハ果然也。

(d) 似テ狢ニ而小ナル者蒙頌也。

(e) 似レ狢ニ而善ク躍越スル者獼猴也。

(f) 時珍曰ク、郭璞ニ云フ、果然自呼フ其ノ名ヲ。

(g) 羅願(爾雅翼)云フ、人捕ヘバ其ノ一ヲ、則拳ゲテ群ヲ啼キテ而相赴ク。雖ドモ殺ストレ之ヲ不レ去テ也。謂フ之ヲ果然ト。以其ノ来ニ之ノ可必也(果然とは必ず来るの意)。

(h) 大ナル者ヲ為シ然ト為レヌト。小ナル者ヲ為シ狢ト為レヌト。南ノ人名ニ仙猴ト。俗ニ作レ獼猴ト。

(i) 藏器曰ク、南州異物志ニ云フ、交州ニ有リ果然獸一。其ノ名ヲ自ラ呼フ。狀大ニ于猿ヨリモ。其体不レ過ギ三尺ニ、而ルニ尾長ク過頭ヲ。鼻孔向レ天ニ、兩フレバ則チ掛ニ木上ニ、以レテ尾塞ニ鼻孔ヲ。其ノ毛長ク柔細ク滑ニカナリ。白キ質黒キ文アリ、如シ着鴨脇辺ヲ斑毛之狀ノ集メテ之ヲ為シ裘褥ヲ甚温暖ナリ。

爾雅ニ(積獸) 雌ハ仰鼻ニシテ而長尾即此也。

(j) 時珍曰ク、果然仁獸也。出ニ西南ノ諸山ノ中ニ。居ル樹上ニ。狀如猿、白キ面黒頬。多クシテ耨而毛采斑

爛タリ。尾長ク干身ヨリ、其ノ末ニ有リ岐。雨フレバ則チ以

レ歧ヲ塞ク鼻也。喜ニ群行ヲ、老ニユル者前ニ、少キ者

後ニ。食相讓リ、居ニ相愛シ、生ケルトキ相聚リ、死セルトキ

相赴ク。

(k) 柳子(宗元、憎ニ王孫ニ文并ニ序)所謂仁讓孝

慈トハ者是也。古ハ者画イテ雌ヲ為シ宗彝ト。亦取ニ其ノ孝

讓ニシテ而有智也。或ハ云フ、猶子ノ之猶、即狢也。

其性多疑ト、見レバ人則チ登リ樹ニ、上下不レ一ナラ。甚ク

至ツテ奔触シテ破リ頭折レ脛。故ニ人以此ヲ比フ心疑ヒ

不レ決者ト。而俗ニ呼ニ騃愚ナルヲ。為シ獼猴ト也。

(l) 蒙頌 時珍曰ク、蒙頌一名蒙貴。乃チ雌ノ之又小

者也。紫黒色。出ニ交趾。畜レ以テ捕レ鼠。勝ル干

貓・狸ト。

(m) 獼猴 音懶胡(izam-ho)。許氏說文ニ作ニ斬颯ト。

乃チ猿(ハ猿) 雌之屬ナリ。黒身白腰如シ帶ノ。手ハ

有リ長毛白色ト。似シ握版之狀ト。蜀地志ニ云フ、獼猴

似レ猴而甚捷。在ニ樹上ニ欸然騰躍スルコト如シ飛

鳥ト也。

右の各条は金絲猴四種と葉猴の一種を含んだものである。果然はこれらの総称である。(1)の狢を仰鼻金絲猴(川金絲

猴)とする説<sup>55</sup>があり、これに従ったが、綱目が果然と別にしているのは仰鼻の特徴を示していないからである。確証はないが、長尾で金色という特徴から葉猴の一種である長尾葉猴ではないかと考えられる(注12参照)。或は黒葉猴<sup>56</sup>(*Semnopithecus francoisi*)かも知れない。また獼猴も黒色白腰、毛有長毛、白色(m)という特徴から黒葉猴か灰葉猴(*Semnopithecus phayrei* 英名 Phayre's leaf monkey)の特徴を示す。(b)・(c)・(d)はいずれも金絲猴三種を示すが、大きさは大差ないが、体長は川金絲猴が四十九〜七十七センチメートル、滇金絲猴が八十二〜八十三センチメートル、黔金絲猴が六十三・七〜六十九センチメートル、越南金絲猴が五十四〜六十八センチメートルと単純に比較すると滇金絲猴が最も大型。(i)で「白質黒文」、(j)で「白面黒類」とあるのは滇金絲猴の特徴である。果然は黒仰鼻猴と呼ばれるように滇金絲猴を指すのであろう。ただし、「古今圖書集成」引く所の諸書には果然の所在地として次の書が見える。

『蜀地志』御覽所収の「涪陵(四川省彭水県)果然」は「涪陵、南、界有果然獸。形如狗子、頭似虎、其尾柔滑白黒色。皮可爲裘、輕暖可珍」とある。この彭水県は東は湖北省、南は貴州省を境とする長江流域。貴州は古

名黔、この記述から判断して黔金絲猴(灰仰鼻猴)と考えられる。『南中八郡志』(御覽所収)に「交趾有果然。白面黒身、毛彩斑斕」とあり。交趾は今の広東省、広西チワン族自治区の大部分とベトナム北部中部。後漢は交州に改めている。滇金絲猴と越南金絲猴は外形的には似ており後者はやや小形である。今はベトナムにしか居ない越南金絲猴であろう。『呉録地理志』(類聚所収)に「九真胥浦泉有獸、名果然。猿狖類也。色青赤有文。居樹上。此郡及日南皆有之」とある。九真(郡)胥浦泉は秦の象郡の地。漢は九真郡を置く。今はベトナムの東京の地。日南はベトナムの地。この果然も越南金絲猴である。ただし葉猴か長臂猿(テナガザル)の可能性もある。『南方草目状』類聚所収にも「果然獸生在山林上。民人以毒箭射之、剝取皮。皮、文青赤白色。縫相連作席。出九真日南郡」とある。

果然は滇金絲猴であると共に金絲猴四種の総称とすべきであらう。また、生息地域も今より古い時代にはもっと広範であったことは諸資料によって明確である。(d)と(i)の蒙嶺は交趾産、雌(川四絲猴)より小形、紫黒色等の特徴から越南金絲猴であらう。

獬廌は「研究」によると後漢・張衡の「西京賦」や前漢・司馬相如の「上林賦」（注も含む）により、滇金絲猴が最も近く、次いで川金絲猴と黔金絲猴であるとする。次に両賦を引こう。

司馬相如・上林賦 六臣注文選八10<sub>b2</sub>（四部叢刊本）

玄媛、素雌、雌獲（中略）、蠶鑿 猿五臣作<sub>レ</sub>蛛、奴高切<sub>レ</sub>、獬廌胡（中略） 善曰、後魏張揖曰、雌、似<sub>レ</sub>獬廌、獬廌、仰鼻、而長尾。中略 音通。中略（晉）司馬彪曰、中略 獬廌、獬廌也。（中略）張揖曰、獬廌、似<sub>レ</sub>獬廌、頭上<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>鬣、要<sub>レ</sub>（應）以<sub>レ</sub>後黑。

張衡・西京賦 六臣注文選二27<sub>a8</sub>（同右） 杪<sub>ニ</sub>メテ杪<sub>ノ</sub>木末<sub>一</sub>、獲<sub>ニ</sub>鳥獲<sub>ノ</sub>獬廌胡（應） 絲曰（中略） 杪、猶<sub>レ</sub>表也、獬廌、獲、類而曰、腰<sub>リ</sub>以前<sub>ハ</sub>、黑<sub>ニ</sub>在<sub>リ</sub>、表<sub>ハ</sub>、獲<sub>ヲ</sub>謂<sub>フ</sub>、掘<sub>取</sub>之<sub>也</sub>。（中略） 濟曰、（中略）獬廌、類。

(a) から(m)までについて注意すべきことを次に記そう。  
(f)において「郭璞云、果然」とある果然は「山海經」中山經の禺山に記される雌の郭璞注には見えない。郭璞の讀にも果然の語は見えない。「自呼其名」の句は「南州異物志」（類聚所収(i)参照）に「交州以南<sub>ニ</sub>有<sub>リ</sub>果然獸<sub>一</sub>、其<sub>ノ</sub>鳴<sub>ヲ</sub>自<sub>レ</sub>呼<sub>フ</sub>」とある。「太平御覽」九一〇巻果然に引く「山海經」には「以名自呼」とあり、この句は今本「山海經」には見えない。

(i)(j)は最も説話的興味を引く記述である。長い尾の先が両つに別れ、雨が降るとこれで仰鼻（上を向いた鼻）の穴を塞ぐという。これは事実と反するものである。鼻孔の中に雨を防ぐ粘膜があるのである。また群行し、老者を先にし、若者を後にし、家族愛に富み、死ぬと皆が聚るといふ。どこまで事実か解らぬが、集団で暮しており、これが儒教の説く仁徳に合致する。(k)の宗彝という果然を圖案化した祭器が作られたのである（注14参照）。

(m)の握版という語は獬廌の手の様子を言うが、金絲猴の手の甲は板切れを握ったような堅くて平版な形をしているのでこう言ったのであろう。

口『山海經』における金絲猴

『山海經』には狻狂、白猿、長右、狷鬼、彘、鬮、朱厭、拳父（夸父）、幽額、如夸父、泰逢、雌、媛、雍和、耕父、虫状如兔、猩猩等の猿猴類が認められる。この中、雌が金絲猴に該当する。この雌は經中、中山經の三三八禺山と海外南經の四九六狄山と湯山（数字は前野直彬『山海經・列仙伝』全釈漢文体系（集英社 一九七五年十月刊）の通し番号以下これに従う）。前野本は清の郝懿行の『山海經箋疏』十八巻、図讀一卷、訂偽一卷（清・嘉慶十四年へ一八〇九）阮氏瑯環

仙館刻本)を底本にしており、注としては最も充実し、影印本も二種出版されているので、この箋疏本を引用する。

又東五百里曰高山。其陽多白金、其陰多白珉。蒲鶒。郭璞注音、鶒(都)鶒行案、王篇或無鶒字之水

出焉焉。而東流注于江。其中多白玉、其獸多犀象熊羆、多猿猴。唯似獼猴、鼻露上向、尾四五尺、頭有岐、着黃色。兩脚即自懸樹、以尾懸鼻孔。或以兩指塞之。發行案、雌見二爾雅、郭注同此也。広雅云、狢、雌也。

(後漢 高誘注ノ淮南子)覽冥訓云、狢、獾、屬也。長尾而昂鼻。狢、說中山人相遺物之遺。郭注西次四經(西山經)二二嶠嶽之山所収、亦云、雌、獼猴、屬也。音贈遺之遺。

是則雌、即狢矣。音義同。

ここに言う雌は蒼黄色であることから川金絲猴である。

清・吳承志の『山海經地理今釈』六卷(民国十一年へ一九二二)劉氏求恕齋叢書)の巻五46によると高山は「今、松藩府、北甘肅洮州府、西南、羅播普喇山ナリ。山ノ北接、西傾。旧亦通名、西傾山ト、或曰西疆山ト、又曰西疆臺山ト。經、西傾、作「巒傾。」と。西傾山は四川省松潘県の北、甘肅省にあり、経緯は34、36、100、104に位置する。また、衛挺生、徐聖謨の『山經地理図考』(華岡出版部 民国六十三年へ一九七

四)刊)によると四川省の開県と開江県の間に横たわる観面山(31、32、108、109)だとする。甘肅、四川両省には川金絲猴の生息地域であり、高山の雌は明らかに川金絲猴である。

一方、狄山(一に湯山という)は海外南經にある山である。

狄山ハ帝堯葬于陽。呂氏春秋(安死篇)曰、堯葬狄山。今陽

城、西、東阿県城次郷中、赫陽、湘、南、皆有堯冢。發行案、

(劉宋裴駭)史記集解引(魏劉劭主象皇覽)曰、堯冢在濟城陰。

(前漢 劉向曰、堯葬濟陰北、嶺山。呂氏春秋曰、堯葬狄山。

(晉)皇甫詵曰、狄山、即城陽。(唐)張守節史記正義引(唐・李泰)

括地志云、堯陵、在濃州雷沢県、西三里。雷沢県、本漢、鄆陽県也。今

城陽、堯冢、在西、二志皆作「城陽」。郭注作「陽城」。其引「呂氏春

秋」安死篇文也。高誘注云、伝曰、堯葬成陽。此云、狄山、成陽山

下有狄山。是諸書所說。其地皆不殊。唯(節葬下)云、堯

北、教乎八狄、道死、葬于蜚山、之陰。然、即此、經、狄山。

蓋、狄中、之山。今大名府、清豊県有狄山也。(前漢)司馬相如、大人

賦云、歷唐堯於崇山。(魏)張揖注云、崇山、狄山也。引此

經(海外經)曰、狄山、帝堯葬於其陽。云云。(後魏)酈道元、水經、

注、亦引此、經云、狄山一名崇山、崇、聲相近。蜚山、又狄山、之別名也。

狄山は郭璞のいう陽城が今の河南省登封の東南にあつた県

にあるとするのに対して、この箋疏の説では河南省濮陽まつてくの東南、鄆城けんじょうの南の雷沢のほとりにあった城（成）陽（中国歴史地図集③西晋35°36′115°11′②4）であるとす。狄山はこの城陽にあることになる。

城陽は河南省に隣接した山東省にあつたので、ここに生息した金絲猴は川金絲猴であろうが、わずかに黔金絲猴の可能性がある。

（とちお・たけし 成城大学教授）

### 注

- (1) 『中国文物地圖集 雲南分冊』（雲南科技出版社、二〇〇一年三月刊）引く「雲南省少数民族分布図」二十二頁に拠る。
- (2) 中甸から塔城鎮までは雪山の麓をぐるりと廻つて行く。金沙江は雪山を貫流している。
- (3) R・H・ファン・フリーク、中野美代子、高橋宣勝訳『中国のテナガザル』（博品社、一九九二年九月刊）に詳しい。
- (4) 『新刻画像官板大字西遊記』二十卷（萬曆二十年（一五九二）金陵世德堂刊本や『李卓吾先生批評西遊記』等に日本猿と同系のマカク属の尾の短い猿の絵が描かれている。また敦煌壁画の西夏（AD一〇三六―一二七〇年）作にもそれらしい猿が描かれている。『敦煌石窟全集19 動物画卷』所引「猿行者与白龍馬」（香港商務印書館、一九九九年九月刊）
- (5) 中野美代子『孫悟空の誕生、サルのみ話学と「西遊記」』（玉川大学出版部、一九八〇年十月刊）
- (6) 金絲猴の別名については白井祥平『世界哺乳類名検索辞典』
- (7) 和名篇（原書房、一九九三年八月刊）と盛和盛等『中国野生哺乳動物』（中国林业出版社、一九九九年三月刊）及び全国強、謝家驊『金絲猴研究』（上海科技教育出版社、二〇〇二年十二月刊）等に拠る。
- (8) 今泉忠明『しじまに生きる野生動物たち 東アジアの自然の中で』（農山漁村文化協会、二〇〇三年四月刊）第五章 温帯・高原―最後の樂園中の「孫悟空のモデル キンシコウ」一七八頁に拠る。
- (9) 衛挺生考釈・徐聖謨製図『山経地理図考』（華岡出版部、一九七四年八月刊）に拠る。
- (10) 注6所引の文献及び劉明玉等『中国脊椎動物大全』（遼寧大学出版社、二〇〇〇年四月刊）参照。ただし風狸を蜂猴属の原猿とする説は戦後改訂版『国訳本草綱目』の補注に見え
- (11) 孫悟空のモデルについては注4・5参照。
- (12) 長臂猿については注3参照。
- (13) 金絲猴に似ていて金絲猴ではないかと思える長尾葉猴（*Scenopithecus entellus*、英名Hanuman langur）の特徴は尾が長く、毛も長く、体毛は黄褐色、行動は敏捷、樹上生活をし、地面活動もする。異なる所は仰鼻でないことが目立つ。
- (14) 『山海経』中山経、豊山に「有<sup>レ</sup>獸焉。其<sup>レ</sup>状如<sup>レ</sup>猿、赤目赤喙黃身。名<sup>レ</sup>曰<sup>レ</sup>雍和。」とあるが、これが注12の葉猴と考えて支障ない。郭邦、〔英〕李約瑟（Joseph Needham）等『中国古代動物学史』（科学出版社、一九九九年二月刊）では金絲猴と考定している（七十七頁）。目は茶系。
- (15) 宋廟の祭に用いる祭器。雌の模様を圖案化した酒樽。雌樽とも言う。『五経図彙』卷上 尚書図13a 宗彝（寛政三年八月 松村九兵衛等刊）

- (15) 『金絲猴研究』④ 猿二十頁及び注6参照。
- (16) 右研究十九頁③ 果然参照。
- (17) 右研究一〇三、三四七頁及び『中国野生哺乳動物』五十頁及注6参照。
- (18) 博物彙編禽虫典猓然部 影印本63冊八五〇頁、『芸文類聚』卷九十五、獸部下、果然、標点本一六五四頁。影印本『太平御覽』卷九一〇獸部二十一、果然、六b四〇三四頁参照。尚、圖書集成は猿猴部に猿、獬胡、禺を、他に雌、蒙頌、猓然、猓の部をそれぞれ設けている。
- (19) 研究 二十四頁「金絲猴の現今分布」所収の「古今金絲猴分布区」(図)等に拠る。
- (20) ⑤ 獬胡 二十二頁参照。
- (21) 獬胡は獬の誤り。獬は猓、殺すの意。獬はさるの意。以下獬字に改める。
- (22) ※印の杪は鈔に通用。かすめる意。獲はわなにかけること。而は(j)、(m)より判断して面字であろう。「研究」(注6)はこれに従うが、足利本、胡刻本等『文選』諸本は而字である。
- (23) 『漢書』卷二十八上、地理志八上に「濟陰郡(中略)成陽、有堯(彖)臺(臺)臺台(標点本⑥)一五七一頁 中華書局 一九六二年六月刊。
- (24) 『晋書』卷十四 地理上「濟陰郡(中略)城陽舞<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>漁、堯<sub>レ</sub>臺在<sub>レ</sub>西」(中華書局 一九七四年十一月刊)。
- (25) 狄は譚其驥『中国歴史地図集』第二冊西漢(香港 三聯書店 一九九一年刊) 十九、二十、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、千乘郡の狄県。今の山東省博興の西にあり。

附記 図3・8は筆者撮影、図4及び5の「水経」注図の一部自筆にて加筆。



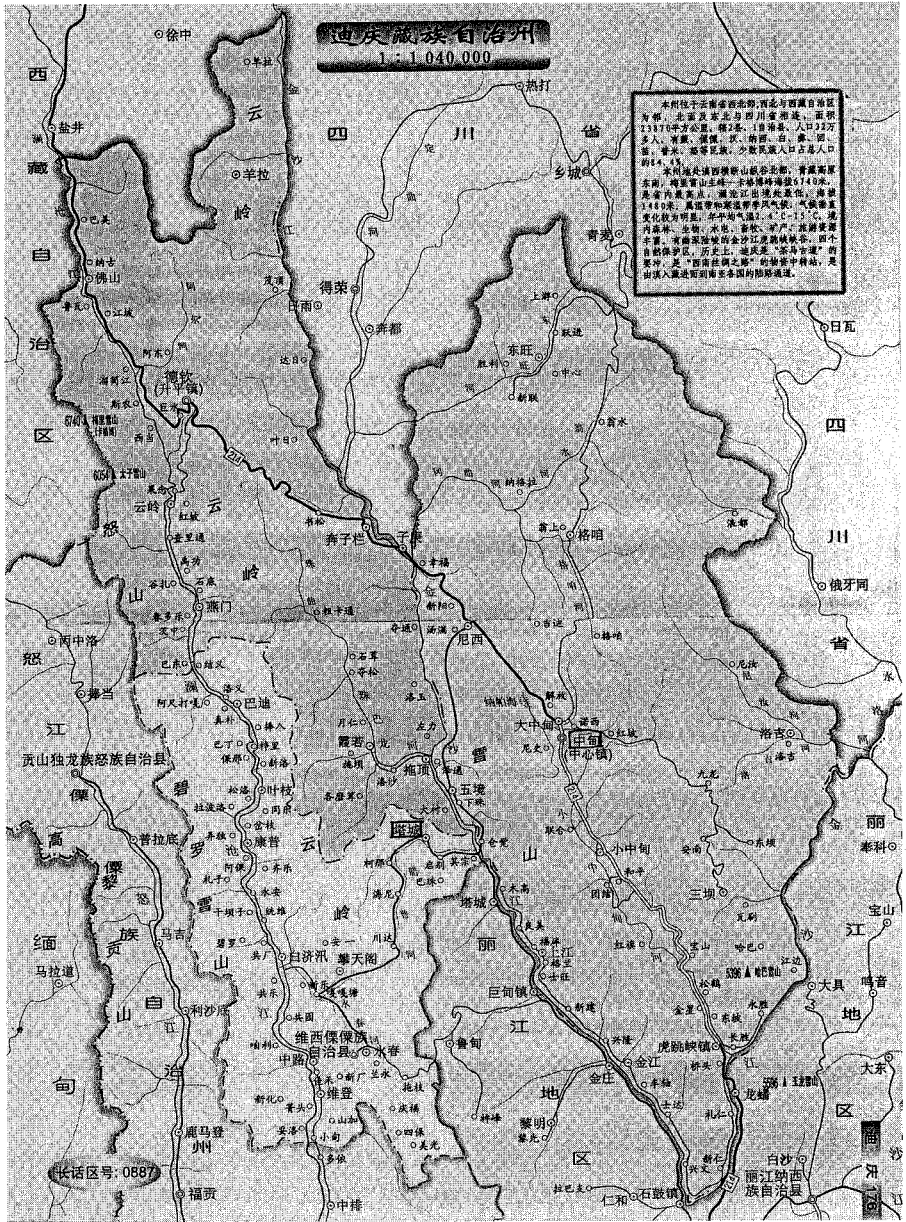
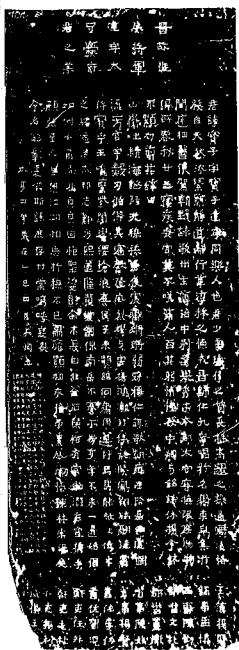


图1「雲南省地図册」中国図出版社 2001年5月より



爨宝子碑及碑文(局部)拓片

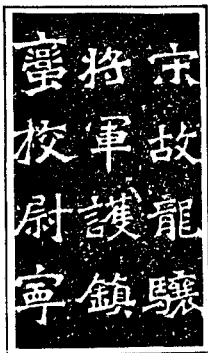
## 爨宝子碑

全称为“晋故振威将军建宁太守爨府君之墓”碑，立于东晋大亨四年，即义熙元年(405)。清乾隆四十三年(1778)在云南曲靖城南杨旗田村发现，现保存在麒麟区东风路曲靖第一中学内。碑高1.83米、宽0.68米。正文13行。碑下部有职官题名13行，全文共403字。碑文记爨氏生平。碑末题名中的主簿、录事、书佐等，与东晋职官相同。碑文书法是由隶书过渡到楷书的典型实物，在我国书法史上具有很高的价值。1961年公布为全国重点文物保护单位。

## 爨龙颜碑

碑出土地点、时间无可稽考，现保存在陆良县薛官堡村斗阁内。碑高3.38米、宽1.46米，圆首，带穿。

上部刻青龙、白虎和朱雀图案，中间题刻：“宋故龙骧将军护镇蛮校尉宁州刺史瑯琊郡侯爨使君之碑”碑名。南朝刘宋大明二年(458)立。爨道庆撰文。碑阳文24行，共904字。正书。碑文远溯爨氏世系，追述爨龙颜祖孙三代均为宁州刺史的仕历，及爨龙颜参与永嘉九年(433)镇压赵广农民起义的活动，可证史籍或以补缺。碑文的书法极佳，楷书间保留了浓厚的隶书笔意，气魄雄浑，结构多变，被称作八分书的楷模。1961年公布为全国重点文物保护单位。



爨龙颜碑及碑文(局部)拓片





図3-1 玉峰寺の万朶山茶花(椿)1465~1487(明治)頃植えらる。男女縁結びの椿。

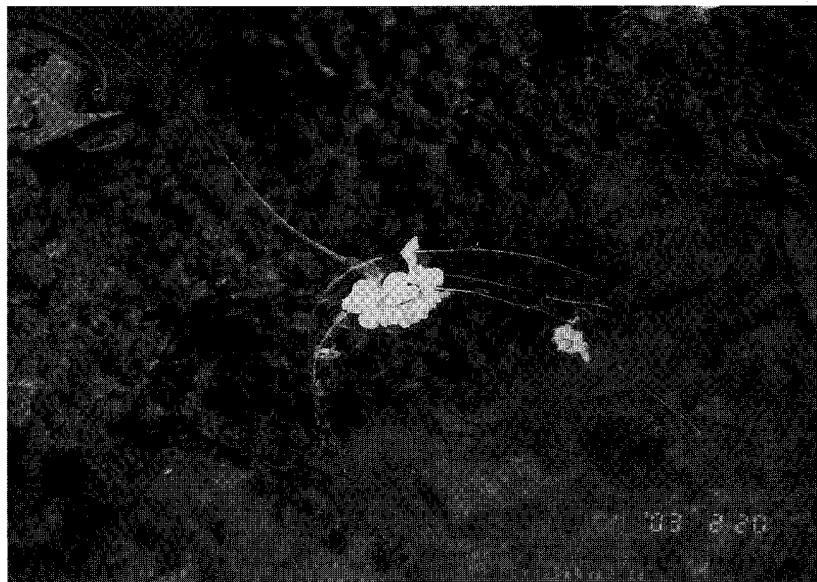
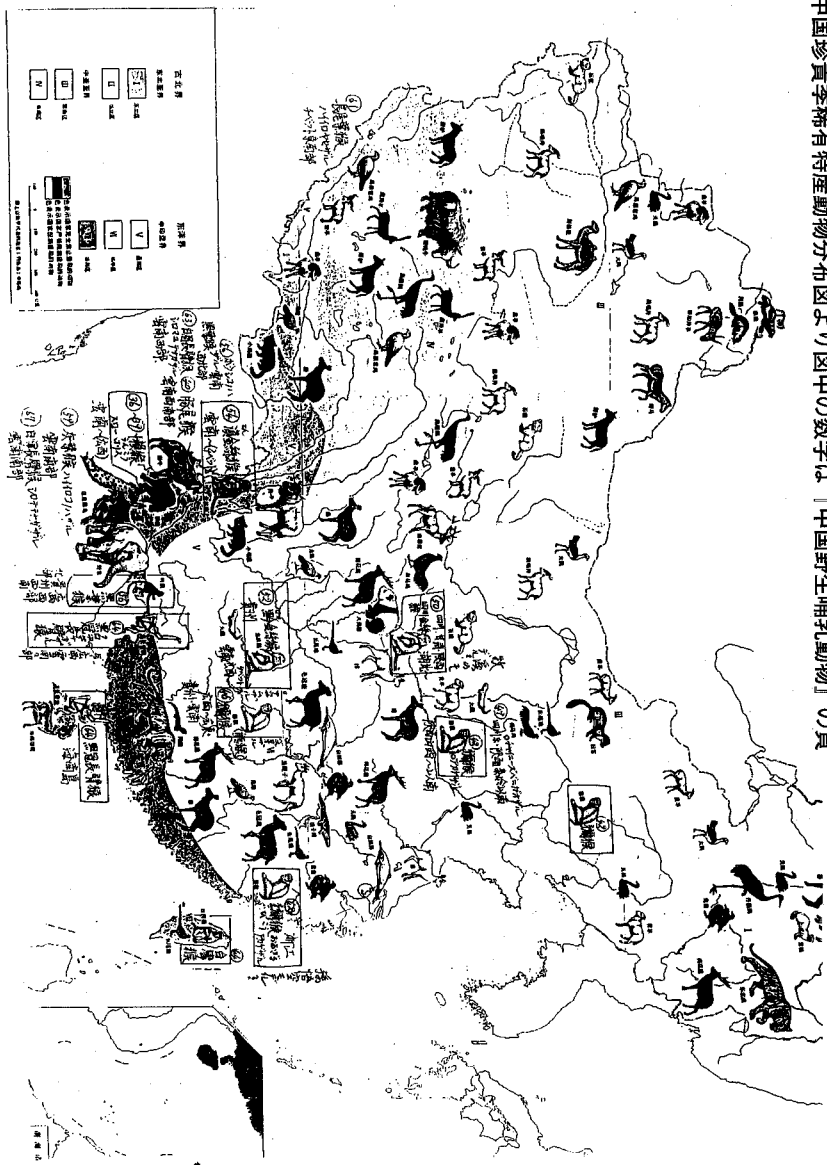


図3-2 麗江黒龍潭の海菜花(トチカガミ科ミズオオバコ属の水草)

図4 中国珍貴季稀有害産動物分布図より図中の数字は『中国野生哺乳動物』の頁





戈阿千『東巴文化真籍』  
雲南美術出版社  
2001年9月刊より

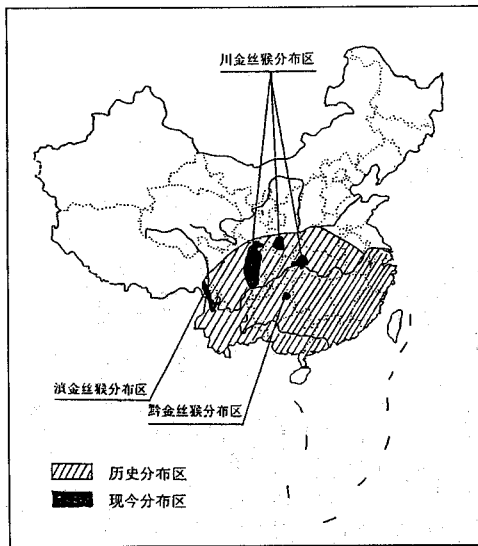


图1-2-1 古今金絲猴分布区



五經圖彙

卷之上

書

宗彝 同 虎雌。取其孝也。

○彝形見博古圖。不與此同。未詳上古之制。關以俟考。



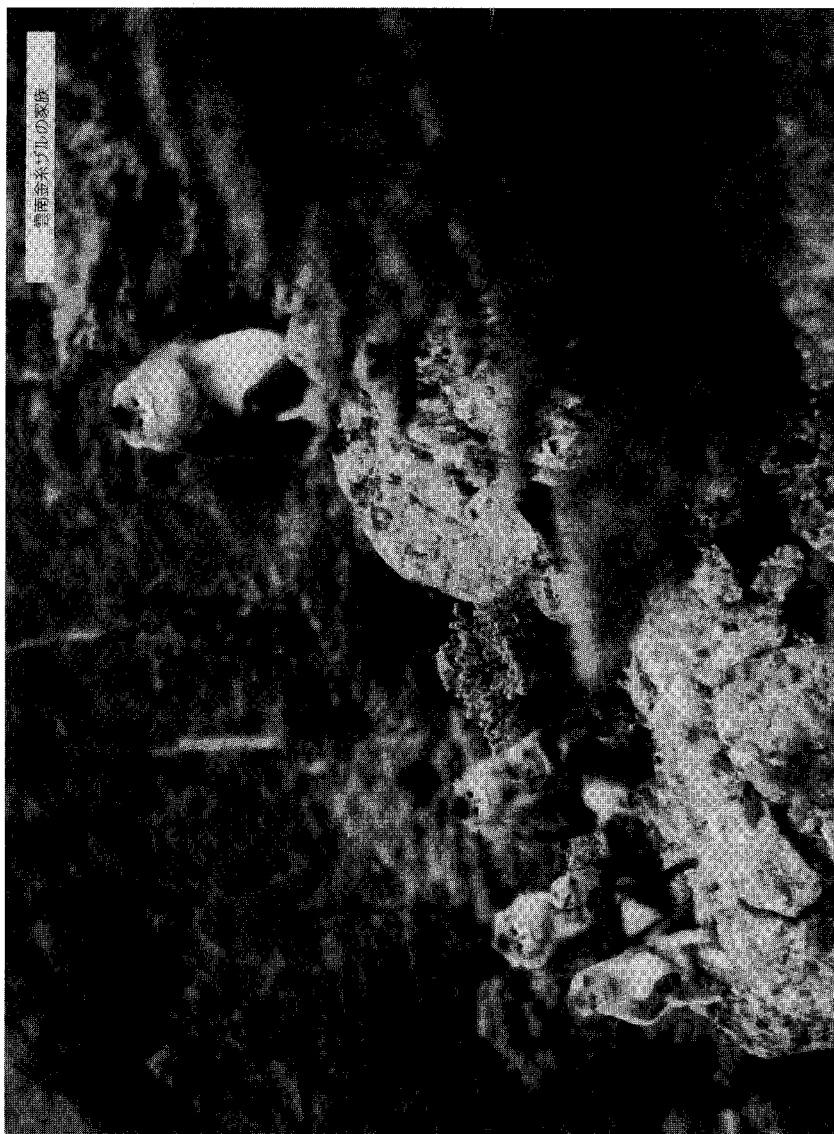


図7 「シャングリラ観光」中華人民共和国国家観光局より

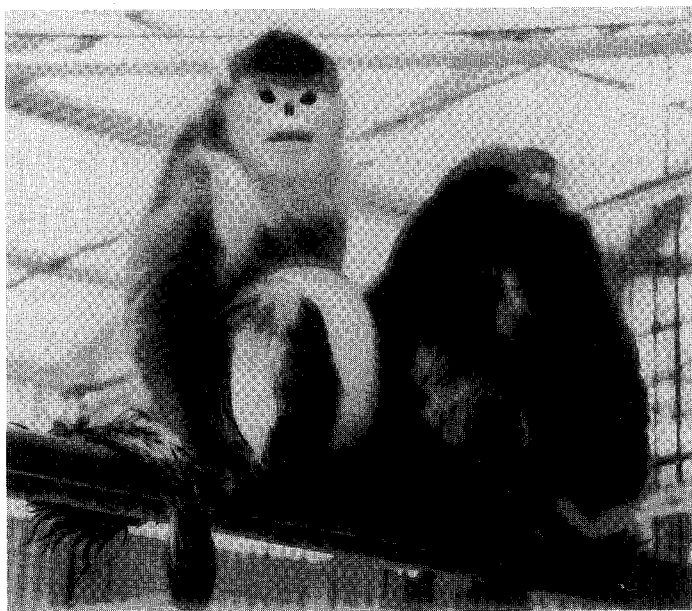


図 8 - 1 中国科学院雲南動物研究所の滇金絲猴



図 8 - 2 雲南省維西傈僳族自治県塔城鎮薩瑪閣自然保護区の滇金絲猴